方向
第五九号　一九八六年一一月三〇日　京都市上京区下長者町千本西入妙徳寺内　方向社

南山大師の戒律観（四）

赤谷明海

この智称は又法献にも受けたがその時の同門に僧祐あつて『十誦』に委しく、劇賓の曇摩蜜多の弟子法達からも『十誦』を聞いてゐる。先に述べた法聡の同門に僧弁と法超とがあり、僧弁の弟子に僧詢・智文あり、又僧詢と同時代の人に曇瑗あつてその門より僧瑋を出し、皆『十誦』を研究したが、就中智文は特に優れた学績を遺しその門下に宝定・慧峙・智昇・道成等多くの学者あり、更に道成の弟子に慧蔵・法祥あつて『十誦』の研究大いに行はれた。殊に梁陳時代にあつては南地の律学は全く斯学の独占するところの如き観を呈する。

次に『四分』に就いてであるが、〈北〉魏〈太〉武〈帝〉の法難の後、其の地に律を弘めた志道と同時の人として斉に超度あり、『十誦』及び『四分』を善くして『律例』七巻を著したと言はれるのが、『四分』研究者として史上に現はれる最初の人である。其の後北魏孝文帝の頃法聡出で、もと智祥門下にして『僧祇』学者であつたが、「体既四分而受。何得異部明随」〈註〉とて当時受体は『四分』に依りながら、戒本随行は他部に依る事を嘆き、後専ら『四分』の敷揚に努め、四分律宗伝燈の第三祖とされる人である。

〈註〉『律苑僧宝伝』巻二（大日本仏教全書本、一四七頁下段）

その弟子に道覆あり、初めて『四分律疏』六巻を製し、門下に有名な慧光出でて『四分略疏』四巻を著した。

此の慧光によつて四分律宗の基礎が固められ、北地にその流通を見るに至つたのである。彼は言ふまでもなく、『華厳』『涅槃』『維摩』『般若』等の巨匠であり、律に於いては『四分』の外『僧祇』『十誦』にも委しく、更に大乗律を究める等、全く大小二乗に通じてをり、その四分観に於いても単なる小乗的立場に止る筈なく、後世南山に及ぼせる影響少なからざるものがあつたであらう。慧光の上足に道雲あり、『疏』九巻を作り、第六祖として四分の正統に列する人。同門に道暉・智閏・道楽・僧達・曇隠・洪理・法上等の駿足あり〈註〉、夫々研究・講学・持律によつて名あり、ここに於いて四分大いに流行を見るに至つた。

〈註〉道暉に『略疏』七巻、道楽に『鈔』四巻、曇隠に『鈔』四巻、洪理に『鈔』二巻あつたと言はれてゐる。右の中道暉に関しては『伝律図源解集』巻上には道輝とし、『略雲疏』十巻の著ありとする。これは誤りであらう。

道雲の弟子中、道洪（鈔アリ）・洪遵（疏八巻アリ）傑れ、法上に就いた法願〈註〉の弟子に道行・道龕出で皆隋代に活躍したが、就中洪遵は特に『四分律』のみを流行せしむるに功あり、その門より洪淵（疏アリ）・慧璡・玄琬を出し、洪淵の門より法砺出で、『四分』の傍ら『十誦』『摂〈大乗〉論』を研究し、著す所『四分律疏』十巻・『羯磨疏』三巻・『捨懺儀軽重叙』一巻等あり、相部宗の鼻祖となつた。

〈註〉法願には『疏』十巻『是非鈔』二巻の著があつたと言はれる。『伝律図源解集』上には彼を慧光の門下とするが慧光は彼の十四才の時没してゐる。

更に道洪（四分伝燈第七祖）より学を受けた者に智首・慧進・慧休・道儼あり、その中智首はもと慧光の師仏

陀跋陀の法孫に当る智旻に投じた人、道洪の門に入つては同学七百人中特に頭角を見し、学きわめて該博、『五部区分鈔』二十一巻を著し、五部律典の同異を括り、廃立を定め〈た〉と言ふが、是によつてその学風の綜合的なるを察する事が出来、この嗣法門徒の中より道宣・道世の如き人物を出したのも当然の次第である。

斯の如く四分律研究は斉代慧光によつて基礎が築かれ、梁・陳を通じて北地に栄え、その学風は綜合的であり諸部を包括して次第に膨脹発展し、以て初唐の南山に及び、遂に四分律宗の大成を見るに至るのである〈註〉。

〈註〉以上は主として『伝律図源解集』『律苑僧宝伝』宇井氏『支那仏教史』に依る。

終りに大乗戒に就いて一言すれば、大乗経典中六波羅蜜を説くもの多く、又それを説かないまでも主要なる経典は殆んど戒に就いて言及してをり、随つて大乗戒に関する翻伝は大乗経典の翻伝と略々同時にあつたものと考へられる。さすれば大乗戒はむしろ小乗戒よりも早く支那に伝つたと見られるが、勿論小乗戒の如く実際行事の上に用ひられたのでもなく、単独に戒律研究の対象となつたものでもない。所謂大乗戒として問題になるのは、主として戒を説くを目的とした経典の訳出を待つてである。今その主要聖典の訳出表を示せば、〈上掲〉

書名	巻数	訳出年時	国名	訳者
『瓔珞本業経』	二巻	三七六	姚秦	竺仏念
『梵網経』	二巻	四〇六	姚秦	鳩摩羅什
『地持経』	十巻	四二六	北涼	曇無讖
『優婆塞戒経』	七巻	四二六	北涼	曇無讖
『菩薩善戒経』	九巻	四三〇頃	劉宋	求那跋摩
『占察経』	二巻		隋	菩提登？

等である。是等諸経の訳出あつてより次第に講及され、特に慧光以来律学者の中に大乗戒をも兼ねて研究した者

も多いが、実際受持の上に於いて、小乗戒律の方がより密接である関係上、その盛大さに及ぶべくもなく、偶々『梵網』の如き相当の研究者を得ながら、一宗一派の成立も見られず、遂に南山の如き四分学者によつて、四分宗学中に融合されるに至つたのである。

本論　南山大師の戒律観

第一章　南山大師略伝

南山の正伝は『宋高僧伝』巻十四〈註〉にあるが、此の伝は潤色が多く、歴史的事実を伝へる事が甚だ少い。併し幸に多数に上る著述の中から、批文等を拾集する事によつて、或程度までその経歴を明にする事が出来る。

〈註〉正・50・790・b

彼の俗姓は銭氏、丹徒の人、或は長城の人と言はれる〈註1〉。隋開皇十六年〈五九六〉四月八日出生。十五歳長安日厳寺智頴の下に投じ〈註2〉『法華』等の業を受け、翌年得度。大業十一年〈六一五〉智首によつて受具〈註3〉武徳四年〈六二一〉智首に就いて律を学び、同七年終南倣掌谷に還り、後又出でて智首より律を聴き遂に同九年『行事鈔』を撰した。此の年は法砺の『四分律疏』の出た年でもある。翌貞観元年〈六二七〉に『拾毘尼義鈔』を撰し、同四年『行事鈔』を重修したが、此の四年頃は終南山北清官寺に住してゐたらしい。更に貞観八年には『戒本疏』が製され、翌九年には『羯磨疏』が出来上つた。此の年彼四十才であり、律に関する重要

著述は殆んど出揃つた訳である。而もこの年には智首・法砺相次いで寂し、就中法砺の死は、南山が諸律の異伝を求めて出遊し、法砺の許に至つて僅に、一月を経た時の事である。かくて南山は沁部山中の僧坊に入つて著作に従ひ、十一年頃は湿州に居り、後長安に戻つたが十六年喧を避けて終南山豐徳寺に隠れた。同十九年玄奘天竺より帰朝するや、南山も召されて弘福寺の訳場に列したが間もなく戻つて盛んに著作の成果を挙げた。永徽元年〈六五〇〉再び弘福寺に入つて翻経に参じ、顯慶三年〈六五八〉最明寺の造営成るや勅を奉じて上座となつた。龍朔元年『帰敬儀』『仏道論衡』を出し、更に麟徳元年〈六六四〉『内典録』の大作を完成し、老年の衰弱を嘆きつつ尚も休まず、『広弘明集』『感通録』『釈迦氏譜』等を撰し、乾封二年〈六六七〉二月、多年念願の戒壇を清官浄業寺に建立し、更に『律相感通伝』『祇洹図経』『付嘱儀』の著作をも成し遂げ、同年十月三日七十二歳を以て遷化した。高宗は詔してその肖像を図せしめ、以てその道風を追慕し、代宗は毎年香一合を師の堂前に賜ひ、懿宗は澄照と諡し、塔も浄光と名付けたが、如何にその徳望の高かつたかが判る。

〈註1〉生地に就いては異説が多い。丹徒は潤州、長城は湖州、『開元録』には呉興の人と言ひ南山の自署にも「呉興沙門」とするものがある。更に『資持記』は京華即ち長安の人と言ひ、日本に於いても多く之の説に従つてゐる。大体南山の生年は陳亡んでより十数年しか経ず、而も父は陳の吏部尚書であつた点から見て中支の人と言ひたいが、『資持記』は李邕の『南山大師行状』に拠つてをり、此の書は南山歿後百七十年頃のもので『宋高僧伝』より余程信をおくに足るものである。

〈註2〉智顗と言ふは慧顗の事で、『続高僧伝』巻十四にその伝がある。武徳年間、南山が智首より律を聴

く事一遍にして禅定を修せようとした時、「夫適遐自遷因微知章。修捨有時功願須満。未宜即去律也。」（『宋高僧伝』）と呵し、律を聴かしむる事二十遍ならしめ、又「戒浄定明。道之次矣。宜先学律。持犯照融然後可也」（『続高僧伝』）と教へたと言ふ。南山が師事した時彼四十七才。学は戒律のみならず『中論』『百論』『般若』『唯識』に精しく、又『法華』を講じ、智首、道岳等その風を敬つたと言ふから優れた学匠であつたと思はれる。歿年は貞観十一年、南山四十二才の時である。

〈註3〉歿年七十二才、坐夏五十二より逆算して古来大業十一年受具と言ふのであるが宇井氏は十二年であらうと言つてゐる。満二十才進具の制制〈？〉と安居の期間とに依って計算すれば、大業十一年四月八日より、翌十二年四月十五日までに受戒してゐる筈であるから両説とも理に契つてゐる。然し今は古来の通説によつて前説を取る。

彼一代の著述に就いては、『大唐内典録』に自ら、十八部百十余巻を挙げ、『開元録』には八部八十一巻『撰集録』〈註1〉には「総五十七件、計二百六十七巻、若約小巻則二百九十巻」と言ひ、望月氏〈註2〉は「三十五部百八十八巻」と数へ、諸説の間に大きい差がある。是等諸著作の制作年時・内容等に関しては多くの問題があり、精密なる考証を必要とするが、今当面の課題はそれにあるのではない〈註3〉。

〈註1〉具には『南山大師撰集録』と言ふ。境野博士は『支那仏教史講話』巻下（六九七頁）にこの書は現存してゐないとしてゐるが、是は元照の著であり、その『芝苑遺編』に含まれてゐる。

〈註2〉『仏教大辞典』道宣の条下。

〈註3〉委しくは境野氏『支那仏教史講話』巻下（六七八頁以下）参照。

然し今、史伝・地誌・護教・目録等に関するものを除き、ただ戒律に直接関係を有する著述にして、而も現存のものを拾へば、〈上の表〉

書名	巻数	制作年時	所収典籍
釈門集僧軌度図経	1	武徳七年	大日本大蔵経　小乗律章疏一
四分律刪繁補闕行事鈔	3	武徳九年	正40　卍続（1）69-70
四分律拾毘尼義鈔	3	貞観元年	続（1）71
四分律比丘含注戒本	2	貞観四年	正40　続（1）62
教誡新学比丘行護律儀	1	貞観八年	正45　続（2）10
四分律刪補随機羯磨	2	貞観九年	正40　縮列7
量処軽重儀	1	貞観一一年	正45　続（2）10
四分律比丘尼鈔	3	貞観一九年	続（1）64
新刪定四分僧戒本	1	貞観二一年	続（1）61
四分律刪補随機羯磨疏	4	貞観二二年	続（1）64
四分律含注戒本疏	4	永徽二年	続（1）62
釈門章服儀	1	顕慶四年	正45　続（2）10
関中創立戒壇図経	1	乾封二年	正45　続（2）10

の十三部二十七巻を数へる事が出来る〈註〉。

〈註〉主として『撰集録』に依り望月氏『仏教大辞典』小野氏『仏書解説辞典』を参照した。上掲表中『羯磨疏』『戒本疏』が晩年の作になつてゐるがこれは重修の年で、初作は前者が貞観九年後者が貞観八年であること本文中に述べた通りである（撰集録に依る）。

尚、南山の戒律思想を知る上にもつとも重要なる著述は『行事鈔』『羯磨疏』『戒本疏』の所謂三大部、及びそれに『拾毘尼義鈔』『比丘尼鈔』を加へた五大部であるとは言

へ、表中に示してゐない『釈門帰敬儀』『浄心誡観法』等も見逃す事は出来ない。

次に南山の思想に直接影響を与へた人として、慧頵・智首・法砺・玄奘・窺基の五人を挙げる事が出来る。此の中法砺とは面接の間少く、又影響する処あつたとしてもただ四分の律学以外には出なかつたと思はれ、又玄奘・窺基はその法相系の学によつて相当の影響を与へた事は明かであるが、何分その交渉は南山が老年期に入つてからであり〈註〉、それまでに律の主要なる著作が大体完成してゐるため、是も比較的少いと言へる。而して最も強く南山の思想の中に生きたものは、慧頵と智首との思想・学風であらう。慧頵と南山との師資生活は大凡二十八年間続き、特に少青年期の南山の精神に慧頵の植ゑつけた戒定慧三学漸次漸成の思想や、『般若』『法華』三論系の学解は抜き難い影響をもたらした事と思はれる。更に智首との関係は約二十年の間であるが、彼の背後には慧光があり、慧光より流れる『華厳』『涅槃』『維摩』『勝鬘』『摂論』の諸経論、及び『僧祇』『十誦』『四分』大乗律に関する学統と、特に戒律に於ける大小融会の学風とは、智首を通じて南山に及び、彼の思想信仰を余程必然づけてゐる事は想像するに難くない。

〈註〉貞観十九年六月南山召されて弘福寺に入つたのは五十才の時である。因に玄奘は南山より四年、窺基は三十六後輩に当る。

孤山雁信

—赤谷明海書翰集—　（三）

原田憲雄編

★1984.5.9. 東森善城氏宛。手紙。墨書。同封「唐招提寺梵網会法要次第」「唐招提寺新宝蔵展観目録」は省略

貴兄からの絵葉書と同時にうちわまきの案内状数通到来しましたのでお届けします、気がむけば御利用下さい
森野薬草園〈訪問〉の事なかなか実行にまではこぎつけかねています、春先にひいた風邪の後遺症でまだぶらぶらしている始末です　但しそのうち出かけます　その節には連絡します　最近大東市の稲田さんから電話があり貴兄の事をなつかしがっていました　では万々拝眉の折に、　五月九日　赤谷生　東森善城大兄

★1984.11.16. 同氏宛。葉書。墨書。

其後如何御過しですか　本日茶壷の封を切りましたので　僅かですが別便でお送りしました　缶は地元のものですが産地は田辺町飯岡です　荒茶のままの玉露ですので淹れ方にご留意を　十一月十六日

★1985.3.18.〈消印は、60.2.18〉同氏宛。葉書。墨書。

御便り拝見しました　方向は原田兄から各冊十部宛頂戴したものの中から差し上げたものです　借りておくなど仰せられず御自由に処分して下さい　拙宅の梅もちらほら咲いてきました　春を目の前にしてよくも生きてこれたものとの感慨があります、華中でのあんな暮らしがあったものですから。

★1985.8.21. 同氏宛。葉書。

前略　八本の県立病院行は来る二十六日と決りました、当日午前九時過に中央放射線科受付（正面突当り一階）へ参ります、貴兄もし御都合悪ければ二十九日午前九時頃第三内科へ行きますので、その日でもかまいません
尚、二十六日放射線科での検査終了は順当にいって十時半頃でしょう。

★1985.9.5. 同氏宛。手紙。墨書。

一、一別以来半月余、その後如何　橋本屋でのビールが過ぎて血圧が上がったのではないかと案じています

一、あの時の写真が焼き上りましたのでお目にかけます

一、その後竹内氏より連絡あり、水害の疲れか、リュウマチのため四肢痛み、病院通いをしているとの事です

一、次の文章は延暦僧録の慶俊伝に見える一節です、中につき、二十二重の語義を教えて下さい、華厳関係の文献に出る用語かと推測しています

華厳経者、根本之法門、圓音之極説、言詞誇誕、理義包富、二十二重皆華蔵界、塵沙世種指一王都（云々）

（富字、一本留トス）

★1985.9.10.同氏宛。葉書。

承っておりました鳥取の梨　只今到来しました、早速に仏様に供え山ノ神と共に賞味いたしましたところみずみずしくて甘さも十分、誠に結構な味でした、御厚情の程、有難うございます、二、三日来秋気漸く相催しやれや

れとの思いです、阿騎野にはぼち々々葛の花が見られる頃でしょうか。取急ぎ御礼まで、十日夕

★1985.10.8.同氏宛。葉書。

五日夜付のお便り拝見、桐渓先生の御寺に於ける御動静委しく承りました　奈良から次の布教地に向われたものでしょうか、或いは貴寺での説法が最後だったのかもしれませんね、それにしても数日前の御元気な姿を見ておられるだけに驚きも一入だったでしょう、小生にしても貴兄に伝言を依頼したばかり、まさかの思いです、貴兄のお便りと一緒に佐藤哲英先生一周忌法要の案内状が入りましたがそこには法話－桐渓先生とあります、波紋あちこちに拡散中というところでしょう

★1985.12.28.同氏宛。葉書。墨書。

昨廿六日御書拝見、本日木炭二箱到来いたしました、炭はお正月用に購入しますが当今は贅沢品とてケチリながら三ケ日だけ使用するような始末、誠に豪勢な頂戴物をしたものです、有難うございます、それにしても拝見したところくぬぎの切炭、その上送料は高く、莫大な負担をおかけしたようで恐縮です、来春にでもお目にかかった節は小生から特別飛び切りの御馳走でも差し上げることにしましょう、正月まであと数日、毎日完全防寒の物々しい恰好で庭掃除に励んでいます、世間では悪性の風邪流行とか、外出はひかえてよい年を迎えて下さい、では又、

★1986.6.12.同氏宛。葉書。

梅雨に入ったと云われながら爽やかな日が続いています、いつお便りしたのやら忘れる程に長い間御無沙汰して

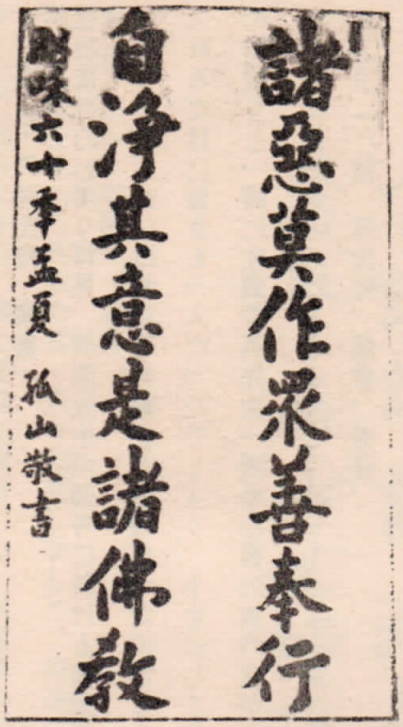
いますが、お変わりありませんか、小生四月からＮＨＫの篆刻講座を受けたり、五月からは土橋秀高氏の戒学研究会に参加したり欲深いことをやっていますので八木の病院とは疎遠になっていますが　そろそろ定期検診に出向かねばと思っているところです。先月京都博物館で久し振りに山崎君に会いました

★1986.7.7.　同氏宛。葉書。墨書。

拝復奈良県立医大付属病院にて面晤の件、来る七月十六日（水）午前自由一時半　中央放射線科（一階正面玄関突当り）受付へお越しいただければと存じます　いずれ拝眉の節万々　草々　七日

★1986.7.19.同氏宛。葉書。

十七日付芳書有難く拝誦しました、荊妻への数々の御恵与、お心づかいの程恐れ入ります、一昨年の腰折三首のこと、すっかり忘れていました、コピーまで示されると否定する種もなく、ヘタな歌の主は確かに自分であることを認めます、第三首は「怒涛の如く、寄せくる君がことの葉の、なかに際立つ竹渓山寺」とよめば何とか字余りも救われそうです、恥の上塗りですが三十一日までに書上げたいと思っています、出来上がればお知らせします、いずれ又、十九日



（東森善城氏蔵）

★1986.8.10.同氏宛。絵葉書（大和多武峰）。

こんな絵葉書を入手しましたので時節はずれながら一筆啓上の具といたします　残暑相変わらずきびしいですがお変りありませんか、当所は御地より何度か高温のはず、いやはや暑いのなんの、今年は特に身にこたえる気がします。松田亮君から突然来信、寿岳先生に会いたいので近況を知らせとのこと、柴野君の母上今年一月御往生されたのを最近知りました、昨十八日大三輪病院でＣＴ検査のため桜井へ参り、帰途金谷石仏、三輪明神を巡ってきました、ＣＴは八木の病院では順番がなかなかこないとのことで桜井行きとなりました。慢性肝炎の疑いです、疑いが決定をみるまで検査があれこれあり、それがウンザリです。いずれ又お知らせします。

★1986.8.24.同氏宛。手紙。封筒のみ墨書。

御手紙有難うございます、ＣＴ検査は八木の病院では順番待ちで日数がかかるので大三輪病院に依托されたような次第、これからは相変わらず八木の病院で世話になるということです。但し今までの担当医が奈良教育大学教授に転勤され、従来からの患者のため週一回だけ医大へ出向という形なので、その先生以外の医師も割り込んでくる恰好、此方としては誰の指示なのか判らない場合があります、病院からは腹部動脈造影のため三十日に入院せよとの連絡がありましたが、大三輪病院でのＣＴ検査の結果なのかどうかも知らされず、次の診察日（以前からの担当医の出向日）にはどう変わるかもしれません　病名が決定してしばゝゝ通うということになれば他の病院に移ることも考えています、何にしても当分は八木通いが続きそうです、

中外日報の切抜き御恵与、早速に拝見しました、槙女史の論考、なかゝゝの力作、就中薬物の考証は『東征伝』理解のためよい参考となります、どんな人か全く知りませんが　大変な勉強家らしく　こうした人が鑑真研究者

の中におられるのを知りたのもしい事に思っています、

三枚目（下）の第一段九行目の「南岳の恩公」（刊本の三才図会でも恩公）を仏恩を受けた方と解釈されたのか道宣に当てていますが、南岳は終南山でなく衡山のこと、恩公は思公、即ち慧思で、誤字か誤植でしょう。これは東征伝や鑑真大和尚伝（広伝）逸文により明らかです。

甲子園での高校野球が終わったとたんに秋気が動き出し、久し振りの雨もあってやや涼しくなりました、此方でもようやくひぐらしの声がきけるようになりました、気候の変り目にさしかかったようです、自分の身体のことばかりお耳に入れましたが、時節柄貴兄にも十分保養下さるよう、なお奥様にもよろしくお伝えの程願上げます例の短冊まだ筆を下していませんが出来上がれば連絡の上、八木ででもお手許に差しあげたいとの心積りでおります、いずれその節万々、　八月廿四日　明海　東森善城大兄

つくりごと

1986.11.11.

原田　慶

カット　原田道子

しぐれ交りの木枯しが吹いて、落ち葉が舞う。クルミの葉は掃いてもすぐ後から墓地一面に散り敷き、ナツメは雪のように小さな葉を降らせる。そのあとの枝が、空に向かってつまようじを突きたてたように、こまかい柵をめぐらしている。

木枯しが吹いて、また何日か穏やかになり、また木枯しの日が来る。その間隔がだんだん短くなって冬に至る

と天気予報で聞いた。

あと何度か木枯しが吹くとモクレンやムクロジの葉も落ちる。いつの年だったか、塀の外の通り一面に、ムクロジの黄色い葉が飛び散り、通りかかった人を驚かせたことがあった。風に走る落ち葉を追って、私は大急ぎでひろい集めたけれど、あれ以来ムクロジの葉は黄葉するのを待たずに切り落としてしまうようになった。

久し振りに、たまった落ち葉や枯れ枝を燃やしながら、石に腰をおろして足もとを見ると、黒いケムシが頭を振りながらヤブランの葉を渡っていた。なにげなく眺めていると、なかなか気むずかしそうで、神経質な学者のようなようすをしている。口を葉にそわせてすべらせるように確かめ、尾なども時々ぴんと曲げたりする。ころりと丸く見えるケムシのからだも曲げると尾の先の方は細くとがっているのである。何をするつもりなのか、葉を食べようとするのでもなく、からだをくねらせて、すぐそばのスイセンの葉にのぼっていった。

なおもスイセンの葉を、ふむふむと嗅ぐように口先でさぐりながらのぼってゆき、葉の重なりあった間に、からだを入れると、やっと少し落ち着いてじっとしている。口が一点濡れたようにぴかりと光っているのが、こちらをじっと見ているように感じられ、何とも不思議に賢こそうなケムシだと思われた。

たとえ虫でも、しぐさをじっと見ていると、そのひとつひとつに意味があるように思えてくるものである。

以前、寺の庭にカメがいた頃、いくつかいた中でも、一ばん小さいカメが、どうしたわけか甲を下にして仰向きにひっくり返っていた。死んでいるのかと思って起こしてやると、驚いたように目をぱちくりさせて、手で顔をつるんとなでるようなことをした。

その様子がおもしろかったので、主人に話したら、おもしろがって、小説家の富士正晴さんに手紙を書く時につけ足したらしい。富士さんは、その後の電話で「ようもあんなウソを作りやがる」と言われたそうである。

私は、本当のことだのにどうしてウソときめつけるのかと首を傾げたが、ウソと言われると、そうも言えなくはない。しかしカメが目をぱちっとして顔をなでるようにしたことは、誰が見てもその通りであったはずである。

ケムシの仕ぐさが子細ありげに見えたのは、私がすわってケムシに極く近い所で見ていたからである。立って見下ろしていたら、そのようには見えなかったに違いない。

十月中頃の京都新聞で読んだことであるが、イヌやネコは人間のことを何から何まですっかりわかっているの

に、それを人に知られないように努力して、何も知らないふりをしているのではないだろうか、人間の方がだまされているのではないかと思う、というようなことを書いていた人があった。

私は、ネコが庭や墓地に糞をしにくるので、その後始末にうんざりして、ネコは何百年も人間の近くに暮らしているのに、どうして人間の言葉も気持もわからずに、迷惑ばかりかけるのだろうか、いいかげんに人の言葉をおぼえてもよさそうなものだ、と考えていた。

しかしこの新聞記事を読んで、もう一度考えなおした。もしネコが人の言葉をしゃべったらどうだろうか。

ネコはあたりの気配を感じ取るように、耳をぴくぴくさせたり、うす目を開けたりしながら、冬の陽だまりやこたつの傍に丸くなっている。夏は木陰のつめたい石の上や風通しのよい台所の板の間にねそべって、人の様子をうかがっているように見える。

そのネコがすべてを知って、よそへ行って家の内の事をしゃべったりしたら、どんなにうるさいことだろう。ドアを開けてトイレに行ったりしたら、もういやになってしまう。

イヌやネコが、何もかもわかっているとしても、人の言葉を話そうとせず、人間を真似ようとしないで、全く別の世界に住んでいるような顔をしていることは、人間と一緒に暮らしていくために、絶対の必要条件である。ネコがしゃべることの騒がしさに比べれば、糞の後始末はがまんしなければ仕方がないだろう。

「ききみみづきん」の昔ばなしがあるように、人はむかしから、けものや鳥や虫たちの話していることを聞いてみたいと思ってきた。そして動物たちの生命を大切に思い、熱心にその声に耳を傾ければ、ドリトル先生のよ

うに動物と話ができるはずだと思っている。

「ケムシが、考え考え、自分の居場所をさがし歩き、賢こげな顔をして私を見ていました」などと言えば、富士さんは「かってにせい」と言われるだろうか。

ミノムシは「ちちよ、ちちよ」と鳴くと思う人があるように、ケムシも何かつぶやいているのかもしれない。とにかくケムシやカメが抗議に来ない限り、つくりごとを言っていられるのは幸いなことである。

『森田曠平文集』

1986.11.22.

原田憲雄

十一月十日、著者から贈られた。一九八三年、同じ大日本絵画から『森田曠平・画文集―歴史画のこころ―』が出たが普及版共に品切となり、新たにこれを纏めたという。絵の代表作三六点の写真（内一二点はカラー）が入っていて、実質的には画文集といってよく、前集に収めたものと、以後の主要な文のすべてを集め「収録〈絵画〉作品一覧」「画歴略年譜」「〈文〉初出一覧」がそえてあるので、森田曠平の芸術家としての大体はこの一冊で伺いうる。前集は豪華な本だが活字が大きすぎて、文章を味わうには、わたしには、かえって不便だった。このたびのは読みやすく、散文の書き手としても優れる著者の資質が、どの頁からも閑雅清遠に匂いだつ。画業については吉村貞司氏の「森田曠平と強烈な美女と」、文章については秦恒平氏の「気稟の清質」が既に深切に言いあてている。わたしが蛇足を加えるまでもない。

どの文も、その絵のように潔浄で、秦氏のいうように「はんなり」しているが、「奈落をみるまなざし（お市

の方画像について）」のような凄いものもあっておどろかされる。これは今年の院展出品作「惜春（盲目物語より）」が生れるにいたる動機・経過をのべたもの。谷崎潤一郎の小説を読むうちにお市の方の肖像が心にちらつきはじめ、小谷城跡を訪れなければならないと思うようになり、城主浅井長政の肖像を尋ね歩き、その作者を推測し、お市の方の画像をもとめて高野山にのぼり、長政夫妻の二幅の絵が、双幅として描かれたものでなくお市の方のほうが先にかかれたもので「もっとつきつめて言えば秀吉が昔の恋人であり、現在の寵姫の母君のため当代一流の画家に遺像をかかせ淀の方に与えたのではないか」「二度にわたる落城の阿鼻叫喚を目の辺りにし、長男をあろうことか串刺しにして殺され、前夫長政は頭蓋骨に漆箔を押して盃にされ、勝家は恋敵の秀吉に攻められ自ら城に火を放って自尽した。その時彼女はまさに生きながら地獄をみたに違いない。彼女の肖像画の瞳はその奈落をじっと見据えているのである。」と追求してゆくあたりには、息詰まる興奮を覚えさせられる。これらの推理は、美しさに茫然としうる感性と、画家としての長い修錬のなかで磨いた知識と技術と、東西の古典につちかわれた知性が一体となって導き出したもので、「批評」とは、このような作業をこそいうのではないか。

わたしの好きなのは、風景をえがいたものでは「広沢の冬（初入選の頃）」、旅中の作では「ポルトガル取材の旅」、絵との出合いを述べたものでは「私のマンテーニャ」……とあげてゆくときりがない。

「当時、祖父母はせめて徴兵検査（満二十歳）迄は生してやり度いと語り合っていた」ほど病弱で、友人のわたしが知る限りでも、体のどこかに障害をもたない時のなかった森田君が、今はたれもが長生きするとはいえ、古稀の七十をこえ、専門の画業はもとより、文章においてもこのような集を作り、なお日々に新たに前進するの

を見ると、三歳も年下のわたしは怠ってはおれない。たがいに忙しく、年に一度あうのが精々のことながら、遠い地にでも「在り」と思えば大きな励ましである。切に清健を祈る。

大宝蓮華宝座

―ランカーの岸辺で　（二七）―

原田憲雄

54. そのとき、如来は、知っていてことさらにラーヴァナ王に問うてこういった。ランカー王よ、君はわたしに尋ねようとしている。君の疑いの心のままに、今ことごとく尋ねるがいい。わたしはことごとく答え、君の疑いの心を断ち、歓喜を得させることができる。ランカー王よ、君が虚妄分別の心を断ったなら、境地への障害を治める方法の観察ができ、如実の智慧により内身如実の相、三昧の楽しい遊行に入ることができ、三昧の仏により君の身は摂取され、寂静の楽しい境界のうちにとどまり、もろもろの声聞や独覚の三昧の不浄の垢をとり除き、不動・善慧・法雲等の境地に止住することができよう。如実に無我の法をよく知るなら、大宝蓮華宝座上に坐り、無量三昧を得、仏の職を受けることができるであろう。ランカー王よ、君はまもなく自身もまたこのような蓮花王座上に坐り、法のごとくそれをたもつだろう。無量の蓮花王の眷属も、無量の菩薩の眷属もおのおのみな蓮花王座に坐り、たがいに廻りのひとたちを見つめあい、おのおのはやがてみなあの不可思議な境界に止住することができるだろう。というのは、ひとつの方法を突き詰めてゆくことによって、もろもろの修行の境地に住し、不可思議の境界を見、如来の境地の無量無辺の種々のありかたを見

ることができるようになるからである。これは一切の声聞や独覚や四天王・帝釈・梵天王などがかつて見たことのないものである。

魏訳「爾時如来。知而故問。羅婆那王。而作是言。楞伽王。汝欲問我。隨汝疑心。今悉可問。我悉能答。断汝疑心。令得歓喜。楞伽王。汝断虚妄分別之心。得地対治方便観察。如実智慧。能入内身。如実之相。三昧楽行。三昧仏。即摂取汝身。善住奢摩他楽境界中。過諸声聞縁覚三昧不浄之垢。能住不動善慧法雲等地。善知如実無我之法。大宝蓮花王座上而坐。得無量三昧。而受仏職。楞伽王。汝当不久。自見己身。亦在如是。蓮花王座上而坐法爾住持。無量蓮花王眷属。無量菩薩眷属。各各皆坐。蓮花王座。而自囲遶。迭相瞻視。各各不久。皆得住彼。不可思議境界。所謂。起一行方便行。住諸地中。能見不可思議境界。見如来地。無量無辺。種々法相。一切声聞縁覚。四天王帝釈梵王等。所未曾見。」

唐訳「爾時如来。知楞伽王。欲問此義。而告之曰。楞伽王。汝欲問我。宜応速問。我当為汝。分別解釈。満汝所願。令汝歓喜。能以智慧。思惟観察。離諸分別。善知諸地。修習対治。証真実義。入三昧楽。為諸如来之所摂受。住奢摩他楽。遠離二乗。三昧過失。住於不動善慧法雲菩薩之地。能如実知諸法無我。当於大宝蓮花宮中。以三昧水。而灌其頂。復現無量蓮花囲遶。無数菩薩。於中止住。与諸衆会。遍相瞻視。如是境界。不可思議。楞伽王。汝起一方便行。住修行地。復起無量諸方便行。汝定当得。如上所説。不可思議事。処如来位。隨形応物。汝所当得。一切二乗。及諸外道。梵釈天等。所未曾見。」

梵文 Jānanneva bhagavāṃ Laṅkādhipatiṃ etadavocat—prccha tvaṃ Laṅkādhipate, kṛtaste tathāgatenāva-

kāśaḥ, mā vilamba pracalita mauliṃ, yadyad evākāṅkṣasi, ahaṃ te tasya tasyaiva praśnasya vyākaraṇena cittaṃ ārādhayiṣyāmi, yathā tvaṃ prāvṛtta vikalpāśraye bhūmi vipakṣa kauśalena pravicaya buddhaya vicārayamānaḥ pratyātma naya lakṣaṇa samādhi sukha vihāraṃ, samādhi buddhaiḥ parigṛhitaḥ śamatha sukha vyavāsthitaḥ śrāvaka pratyekabuddha samādhi pakṣānatikramya acalā sādhumatī dharmameghā bhūmi vyavasthito dharmanairātmya yathātathā kuśalo mahāratnavimane samādhijinābhiṣekatāṃ pratilapsyase, tadanurupaiḥ padmaiḥ svakāya vicitrādhiṣṭhānādhiṣṭhitaistaiḥ padmaiḥ svakāyaṃ niṣaṇṇaṃ drakṣyasi, anyonyavaktra mukha nirīkṣaṇaṃ ca kariṣyasi, evaṃ acintyo'sau viṣayaḥ yad ekenābhinirhāra kauśalenābhinirhṛtaścaryābhumau sthitaḥ, upāya kauśala parigrahābhirhārābhinirhṛte taṃ acintya viṣayaṃ anuprāpsyasi, bahurūpa vikāratāṃ ca tathāgata bhūmiṃ, yad adṛṣṭa pūrvaṃ śrāvaka pratyekabuddha tirthya brahmendropendrādibhistaṃ prāpsyasi.（知って世尊はランカー王にこう告げた――質問なさいランカー王よ、如来によって機会が作られたのだ。ためらうな、動揺する頭をもつひとよ。君のねがうままに、わたしは君の質問を解明することによって、心を満足させるだろう。君が虚妄分別の依り処を転じたならば、諸境地の障害に精通し、調査した智慧により、自内証の道理の相の三昧に楽しく遊ぶことを観察しつつ、三昧の仏にうけいれられ、寂静の楽しみを確立し、声聞・独覚の三昧の過誤を超え、不動・善慧・法雲の境地に立ち、法無我を如実に熟知し、大きな宝玉の蓮花の宮殿で、三昧のジナによる灌頂を受けるだろう。それにふさわしい蓮花、自身に種々の神力が賦与される蓮花のうちに自身が坐っているのを見るだろう。そこで互いに顔を見合わすだろう。このような不思議な

境地は一つの行に熟練し、巧みな方法を受け入れる作業を達成することによって実現するのだから、君はこの不思議な境地を進め、多種の色相の変化のある如来の境地に到達するだろう。それは声聞・独覚・外教徒・梵天とインドラとウペーンドラなどによって未だかつて見られなかったものだ。）

「知っていてことさらに」は、唐訳では、ラーヴァナの質問したい意向に限定するが、おそらくそうではなく『楞伽経』が開始されてここに至るすべての状況と事情を含めていうのであろう。魏訳は、そのふくらみを掬いとっている。

わたしが「動揺する頭をもつひと」とした梵文のpracalita mulinに当る訳語が魏訳にも唐訳にも見えない。これもまた、はなはだ難解だ。その難解さは分けると二つになる。一つは「動揺する頭」がラーヴァナのいかなる状態を指すのか。いま一つはこれまでの文脈にこの言葉が投入されたのはどんな意味をもつのか、である。

pracalitaは「震わさせられた、乱された、苦しめられた」というほどの意味。mulinは「頭を持つ者」。そこで安井広済氏は「混乱した頭をもてるもの」と訳し、山口益氏は「動く天冠を有する人」とする。「混乱した頭」は価値としては低く、それをもつラーヴァナは低い者であろう。だとすると続く文章が似つかわしくない。山口訳の「天冠」が『観無量寿経』のと同じなら、立派な宝冠だが、『楞伽経』の梵文では「冠」にはkirita が使用される。ここが特例だとしても、それが動くとは何を意味するのか分からないが、価値として低く見ていないことは察せられる。pracalitaは形は異なるがanukampaと同じ方向で使われているのではないだろうか。もしそう見てよいなら、この時のラーヴァナの疑いは、論理の上での疑いではなく、論理を発出させる意識や無意

識が分岐しないまえの心についての疑いだったに違いない。それなら間もなく出てくる法と非法についての質問に自然につながる。

不動・善慧・法雲等は『十地経』や『華厳経』にみえる菩薩の修行経過すべき十段階（十地）を指す。その十とは、歓喜、離垢、明、焔、難勝、現前、遠行、不動、善慧、法雲であり、第八不動地は努力精進せずに自然に菩薩行がなされる状態。第九善慧地は非のうちどころのない智慧を身につけて十方の一切に仏法を演説しうる状態。第十法雲地はその説法が世界中に真理の雨を降らせる雲のようになった状態で、これを越えると等覚といい仏とおなじ地位とされる。法雲地と大宝蓮花王座の関係については本稿一一「マハーマティ」一七頁に引用した「集一切仏法品」に説明されている。もういちど引いておこう。「ボサツが法雲地に止住すると、ありのままの行為と幻の境界から無量の諸宝をまじえて荘厳した大宝宮殿が生じ、その大きな蓮花の形の王座に坐る。一切の同行の諸仏子に敬い取り巻かれ、十方の諸仏が手をのべ灌頂する。転輪王が太子に灌頂するように。〈ついで〉仏子地を訪い、訪い了って諸仏の法を観じ、如実に修行すれば、諸法中において自在となり、自在となり了ったのを如来の無上法身を得たと名付ける」

この大宝宮殿の蓮花の形の王座が大宝蓮花宝座である。この宝座の出現はボサツが法雲地に到達した徴候なのだから、『楞伽経』を読みはじめて、ここまで来て、ではそのボサツはたれかといえば、ラーヴァナというほかはない。そうして今やラーヴァナが法雲地に到達しようとしているのだと見ても不自然ではなかろう。(11.29)

※前号正誤　一頁一一行　に説→二説